

# イチローの回復された愛国心 ——ジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』 試論

佐藤 清 人

(英米文学)

## はじめに

2001年7月10日、アメリカ大リーグ、シアトル・マリナーズ (Seattle Mariners) の本拠地セフコ・フィールド (Safeco Field) では、21世紀最初のオール・スター・ゲームが行われた。今年最も注目されたのは、ファン投票で337万票の最高得票を獲得して選出された地元シアトルの日本人選手イチローである。イチローの名前は、日本はもとよりアメリカ合衆国においても、もはや知らぬ者はないといっても過言ではないであろう。2001年シアトルの町にやって来たイチローは、今や万人の歓呼をもって迎えられたのである。

一方、今から55年前の1946年、やはりイチローという名前を持ったひとりの日系アメリカ人青年がシアトルの町に舞い戻ってきたことを知っている人はどれだけいるだろうか。といっても、これは現実の話ではない。小説のなかの出来事である。小説とはいえ、このもうひとりのイチローはあまりにも無視されてきた。歴史の中に埋もれてきた。本稿でわたしが取り上げたいのは、このもうひとりのイチローと彼を主人公とする小説『ノー・ノー・ボーイ』である。

## I

『ノー・ノー・ボーイ』 (*No-No Boy*) は日系アメリカ人作家ジョン・オカダ (John Okada) によって書かれ、1957年に出版された小説である。その小説は出版されたものの、ほとんど顧みられず1976年フランク・チン (Frank Chin) やローソン・イナダ (Lawson Inada) 等アジア系アメリカ作家によって再発見されるまで、書店の棚に埋もれていたのである<sup>1</sup>。今日、この小説を指して、日系アメリカ文学の古典と呼ぶ批評家もいる<sup>2</sup>が、この小説に対する社会一般の認知度は、未だに低いといわざるをえない。一方、アジア系あるいは日系アメリカ文学に関心を寄せる人々の間では、この作品に対する評価は揺るぎないものとなっているのもまた事実である。作品研究も年毎に増え、作品の解釈も多様な広がりを見せている<sup>3</sup>。そして、

批評研究が増加するにつれて、作品の解釈に微妙な相違も現れ、また新たな疑問も生じている。

こうした状況のなかで、わたしが本稿で試みることは、まずイチローがノー・ノー・ボーイとなった動機または理由を問うことである。それを問うことなしには、作品のなかで展開されるイチローの苦闘の意味や、その結果を問うことができないからである。そしてこうした考察から私が注目するのは、イチローの合衆国に対する愛国心である。イチロー自身のアメリカに対する愛国心の喪失が、彼をしてノー・ノー・ボーイとならしめたのであると私は考える。さらにそこで注目すべきは、ノー・ノー・ボーイと日系退役軍人との対立もしくは相似性である<sup>4</sup>。アメリカに忠誠を誓った退役軍人とそれを拒否したノー・ノー・ボーイは、じっさい作品のなかで繰り返し反目し合うのだが、両者は同じコインの裏表にすぎない。そして両者に共有されているのは、合衆国への愛国心の喪失である。退役軍人も、その見かけとは裏腹に愛国心を失っている。より正確に言えば、彼らの示す愛国心が見せかけにすぎないことに気づくのである。失われた愛国心の回復へ向かうノー・ノー・ボーイ、イチローとは逆に、退役軍人たちは自らの愛国心が欺瞞であることを悟り、より一層深い愛国心の喪失へと陥っている。本稿では、イチローのたどる愛国心復活の軌跡とともに、退役軍人たちが愛国心を失う姿をも浮き彫りにしてみたい。

## II

『ノー・ノー・ボーイ』は、そのタイトルが示すように、ノー・ノー・ボーイであるイチロー・ヤマダ(Ichiro Yamada)を主人公にした小説である。しかし、ノー・ノー・ボーイとはいったい何であろうか。日系アメリカ人の歴史に関心のある人々にとっては自明の事柄だが、ごく一般の日本人あるいはアメリカ人にとっては、おそらく馴染みのない名称であろう。

ノー・ノー・ボーイが何であるかを知るためには、第二次大戦中のアメリカ合衆国における日本人あるいは日系アメリカ人の歴史をさかのぼらねばならない。1941年12月7日の真珠湾攻撃によって日米間に戦争が勃発した後、日系社会の指導的立場にある人々は、スパイ活動の嫌疑で次々に連行された。さらに年が明けて1942年2月には、フランクリン・ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt)大統領によって行政命令第9066号(Executive Order 9066)が発令され、西海岸に住んでいた日系人12万人が強制的に収容所に転住させられることとなった。そうした人々のなかには、日本国籍の一世のみならず、合衆国市民である二世も多数含まれていた。一方、1943年になると、二世から志願兵を募り、日系人部隊を編成する目的と、収容所から出所を許可できる者を選別するために忠誠登録が行われた。その忠誠登録の質問のなかには、回答困難な二つの質問が含まれていた。その質問とは、以下の通りである。

No. 27. Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty wherever ordered?

No. 28. Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any or all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese emperor, to any other foreign government, power or organization?<sup>25</sup>

アメリカ合衆国軍隊への従軍の意思と合衆国への忠誠かつ日本の天皇に対する不服従を要求するこの質問に対して、日系人ひとりひとりがとった態度はさまざまであった。「イエス」と回答する者、「ノー」と回答する者、回答それ自体を拒否する者など。そしてこの二つの質問とともに「ノー」と答え、徴兵を拒否した二世の若者たちが「ノー・ノー・ボーイ」と呼ばれたのである。イチローはそうしたノー・ノー・ボーイのひとりであった。

一般に、帰化法の制限によってアメリカに帰化することのできなかつた一世とは異なり、アメリカ生まれの二世はアメリカの国籍を持っていた。また、英語は片言しかしゃべれず、日常的には日本語で生活していた多くの一世とは異なり、二世は英語が日常語であり、日本語は片言しか話せなかった。したがって、日本への帰属意識の強い一世とは異なり、二世は合衆国こそ自分たちの国という意識が強かった。にもかかわらず、イチローがノー・ノー・ボーイとなり、アメリカへの忠誠を拒否したのは何故であろうか。その答えは小説のなかで次のように示されている。

There was a time when I was your son. There was a time that I no longer remember when you used to smile a mother's smile and tell me stories about gallant and fierce warriors who protected their lords with blades of shining steel and about the old woman who found a peach in the stream and took it home and, when her husband split it in half, a husky little boy tumbled out to fill their hearts with boundless joy. I was that boy in the peach and you were the old woman and we were Japanese with Japanese feelings and Japanese pride and Japanese thoughts because it was all right then to be Japanese and feel and think all the things that Japanese do even if we lived in America. Then there came a time when I was only half Japanese because one is not born in America and raised in America and taught in America and one does not speak and swear and drink and smoke and play and fight and see and hear in America among Americans in American streets and houses without becoming American and loving it. But I did not love enough,

for you were still half my mother and I was thereby still half Japanese and when the war came and they told me to fight for America, I was not strong enough to fight you and I was not strong enough to fight the bitterness which made the half of me which was you bigger than the half of me which was America and really the whole of me that I could not see or feel.(15-16)<sup>6</sup>

イチローをノー・ノー・ボーイとなるように促したのは、彼の両親、とりわけその母親であった<sup>7</sup>。彼の母親は狂信的なまでの愛国主義者で、日本の敗戦によって戦争が終わった後も、彼女は日本の勝利を確信して、いつか自分たちを迎えに送還船が日本からやってくると信じ続けている。こうして日本に献身的な愛国心を奉げる母親に抵抗できず、イチローはノー・ノー・ボーイとなってしまうのである。

しかし母親の影響は、動機の一部ではあっても核心ではない。なぜなら、イチローはさらに次のように考えるからである。

I did not go because I was weak and could not do what I should have done. It was not my mother, whom I have never really known. It was me, myself.(34)

母親のせいではなく、自分自身が原因であったと認めている。だが、いったいイチロー自身の何が原因なのだろうか。すでに述べたように、第二次大戦中における日系人の強制収容は、日本国籍の一世のみならずアメリカ市民である二世をも含んでいた。それは明らかな憲法違反であった。イチローがアメリカ市民として徴兵の義務を拒否する以前に、合衆国自体が明らかな罪を犯していたのである。イチローは、仕事を求めて尋ね歩きさなか、キャリック氏(Mr. Carrick)という善意のアメリカ人から、ノー・ノー・ボーイの烙印にもかかわらず雇用の機会を与えられる。アメリカの善意に触れつつ、彼は戦時中に犯した国家の過ちが自分の犯した過ち同様に許しがたいものであったことに改めて気づくのである。イチローがノー・ノー・ボーイとなったのは、彼がもはや不正を行う自分の国を愛せなかったからではあるまいか。愛のない国に対して、忠誠を誓うことができなかったからではないだろうか。イチローがシアトルに舞い戻って両親と再会を果たした後、彼の両親に対して示す感情は憎悪と嫌悪ばかりである。それは通常、イチローをノー・ノー・ボーイとならしめ、彼に罪の意識を植え付けた両親に対する反発から生まれた自然な感情とみなされてきたが、その憎しみには嫉妬も含まれているように思われる。なぜなら、狂信的であり、じじつ狂っているのだが、母親が日本に対して抱く愛国心は、イチローが合衆国に対して最も必要としていたものだからである。

III

『ノー・ノー・ボーイ』は国に対して罪を犯したイチローの贖罪の軌跡として読まれてきた<sup>8</sup>。しかし、それはこの小説の正しい読み方とは言い難い。イチローは徴兵を拒否して2年の獄中生活を送った後釈放され、シアトルに舞い戻った。2年の刑務所生活がすでにイチローの罪を償っており、イチローは国家によって公的に赦されているはずだからである。イチローが釈放後も心のなかに抱えている苦しみは、自分の犯した罪をいかに償うかではなく、いかにしてノー・ノー・ボーイとなる以前の自分に戻れるか、いかにしてかつてのアメリカに対する愛国心を取り戻せるかということである。われわれは、『ノー・ノー・ボーイ』のなかに、イチローが愛国心を回復する物語を読み取らねばならない。

イチローがアメリカへの愛国心を回復する過程において、二人の重要な人物がいる。それは、退役軍人でありながらイチローと親交を分け合うケンジ(Kenji)と、ケンジを介してイチローの恋人となるエミ(Emi)である。しかし、彼らがイチローとの関係において果たす役割は異なっている。エミはイチローの援助者あるいは協力者であるのに対して、ケンジはイチローの引き立て役である。ケンジをイチローの引き立て役と見なすことに違和感を抱く人は多いに違いない。ならば、ケンジをもうひとりの主人公と呼んでもよい。ただしケンジは、イチローとは逆に、合衆国に対する愛国心を失う悲劇の主人公である。

退役軍人であるケンジは、日系アメリカ人二世のなかでイチローとは対極の立場に立っている。忠誠登録において合衆国に忠誠を誓い、アメリカの軍隊に従軍したのだから。『ノー・ノー・ボーイ』のなかには、ケンジの他にもエト・ミナト(Eto Minato)やブル(Bull)等の退役軍人が幾人か登場する。ケンジを除いて、彼らはみな従軍したことを誇り、それを自らがアメリカ人であることの証としている。しかし、彼らがそれによって合衆国に対する愛国心を堅持し続けているかといえば、決してそうではない。彼らはノー・ノー・ボーイであるイチローを侮蔑し、面と向かって罵倒する。ノー・ノー・ボーイと同じ日系アメリカ人であるがゆえに、彼ら退役軍人までが戦後のアメリカ社会で人種差別を受けているからである。だが、彼らの批判は的を外れである。その点をケンジは鋭く指摘している。

“Let them call you names. They don’t mean it. What I mean is, they don’t know what they’re doing. The way I see it, they pick on you because they’re vulnerable. They think just because they went and packed a rifle they’re different but they aren’t and they know it. They’re still Japs. You weren’t here when they first started to move back to the Coast. There was a great deal of opposition — name

-calling, busted windows, dirty words painted on houses. People haven't changed a helluva lot. The guys who make it tough on you probably do so out of a misbegotten idea that maybe you're to blame because the good that they thought they were doing by getting killed and shot up doesn't amount to a pot of beans. They just need a little time to get cut down to their own size. Then they'll be the same as you, a bunch of Japs.”(163)

一般のアメリカ人からみれば、ノー・ノー・ボーイであれ、退役軍人であれ同じこと。同じ日本人にすぎない。退役軍人が差別されるのは、合衆国のなかに根強くはびこる人種差別のせいなのである。それをイチローやノー・ノー・ボーイのせいにするのは、責任の転嫁にすぎない。イチローに対する罵倒の言葉は、じつは合衆国に向けられるべきものである。おそらくこうしたことは、退役軍人たちにも意識されている。

退役軍人エトは、小説の冒頭で、イチローに出会ったとき、軍隊から放出されたズボンを着、アイゼンハワー・ジャケットを着ている。イチローが食事に立ち寄ったバーンサイド・カフェ (Burnside Café) のウェイターは、これ見よがしに従軍記章をつけている。また、イチローとケンジが酒を飲みに来て来たクラブ・オリエンタル (The Club Oriental) に、ブルは容姿端麗な白人娘を伴ってやって来る。退役軍人たちはその外見によって、自分たちがアメリカ合衆国に忠誠であり、アメリカの社会と文化に同化していることを示すべく躍りになっている。こうした懸命さは、逆に、彼らが容易にアメリカ人とは見なされないこと、アメリカの社会には受け入れられないことを退役軍人自身痛感しているからにほかならない。

皮肉なことに、退役軍人が抱えるこうした矛盾、さらに愛国心の喪失は、ケンジのなかにもっとも顕著に現れている。ケンジは軍隊に従軍したが、そのおかげで片足を失ってしまった。その傷は癒えることなく彼の身体を蝕み続け、彼は余命いくばくもない身となっている。勲章や年金をもらっても、彼にとってそれは自らの合衆国に対する忠誠や愛国心の証とはなりえない。命の尽きる日が間近に迫り、それを彼が意識しているからだ。しばしばその対比が注目されるように、日本の家屋をそのままアメリカに移しただけのようなイチローの日本的な家庭とは対照的に、ケンジの家庭にはアメリカ的なものが溢れている。ケンジの父は、自分よりも子供たちのためにアメリカに同化すべくアメリカ的な家具調度、電気製品を家のなかに用意したのである。しかし、彼らのこうした努力は報われず、ケンジは早すぎる死を迎えねばならない。

退役軍人のなかでただひとりケンジだけがイチローに同情的な態度を示す。それはおそらく合衆国に対する愛国心の喪失を自ら意識するケンジが、同じ境遇にあるイチローのなかに共感するものを見出したからであろう<sup>9</sup>。死を目前にしたケンジは、自分には合衆国に対する



愛国心を回復する可能性が希薄であるからか、こうイチローに忠告を与える。

“Go someplace where there isn’t another Jap within a thousand miles. Marry a white girl or a Negro or an Italian or even a Chinese. Anything but a Japanese. After a few generations of that, you’ve got the thing beat. Am I making sense?”  
(164)

異人種間の結婚を勧め、人種差を消し去ることを勧めるこの言葉は、日系アメリカ人のみならず、アメリカで人種差別を被るすべてのマイノリティにとって理想のアメリカを語る言葉とも見える。だがそれは、マイノリティがマイノリティのまま人種や民族を堅持する限り、アメリカから人種差別がなくなることはないと言っているようにも思われる。だとすれば、それはアメリカ合衆国の限界を語っているのであり、その国に対する不信を語っていることになるだろう。合衆国への愛国心の喪失という点で、ケンジの心は明らかにイチローの心と共鳴している。しかし、イチローとは異なり、ケンジの喪失感はい埋められることはなく、むしろ一層深まるばかりである。かくして、ケンジの残り少ない人生の軌跡は、愛国心を蘇らせることなく、ひたすら死へと向かうのである。

#### IV

ケンジはイチローとまったく立場を異にしながらも、合衆国に対する愛国心の喪失という点で共感し、イチローに慰めを与えてくれた。しかし、ケンジはイチローが愛国心を回復するためには、必ずしも十分な援助を与えてはいない。イチローが愛国心を回復するうえで協力者となるのはエミである。

エミも間接的ながら、イチローと同様に、強制収容の犠牲者である。エミにはアメリカ軍隊に従軍しているラルフ(Ralph)という夫がいるが、ラルフはヨーロッパに従軍して出かけたまま、エミのもとに帰ってこようとはしない。ラルフが戻らない理由は、彼の兄マイク(Mike)のせいであった。マイクは強制収容所で過激な親日派として活動したのである。だが、それはマイクの本意から出た行為ではなかった。彼は第一次世界大戦にもアメリカに従軍した退役軍人だったのだが、太平洋戦争が始まるやいなや、他の日本人・日系人と一緒に強制収容所に入れられてしまったのである。アメリカ政府の不当な扱いに対して、マイクは反旗を翻し、親日派の指導的役割を果たすにいたった。ラルフがアメリカへ、エミのもとへ帰らなかったのは、こうした兄の行為を恥じたからであった。イチローはマイクの執った行動を自らの行動と同一視するが、エミは反論する。

“I can’t say I blame him.”

“I’m sure he wishes he were back here.”

“He’s got more right than I have.”

She swung around to face him, her eyes wide with anger. “You don’t understand. Mike doesn’t have any more right than you have to be here. He has no right at all any more. It was as if he joined the enemy by antagonizing the people against the government, and you certainly never did that. All you did was to refuse to go in the army and you did so for a reason no worse than that held by a conscientious objector who wasn’t a conscientious objector.” (98-99)

アメリカ政府の不当な行為はマイクやイチローの心に合衆国に対する不信や怒りを刻むことになったが、だからといって、彼らの心に日本に対する忠誠心や愛国心を植え付けたわけではなかった。とりわけ、イチローの場合には、合衆国に対する失望感をひたすら深くするだけだったのである。

一方、エミは彼女自身もアメリカ政府の犠牲者ながら、合衆国に対する信頼を失うことなく、イチローに対してこう助言する。

“In any other country they would have shot you for what you did. But this country is different. They made a mistake when they doubted you. They made a mistake when they made you do what you did and they admit it by letting you run around loose. Try, if you can, to be equally big and forgive them and be grateful to them and prove to them that you can be an American worthy of the frailties of the country as well as its strengths.” (96)

## V

小説の最終章で、イチローは同じノー・ノー・ボーイのフレディ (Freddie) を伴ってクラブ・オリエンタルに行く。彼らはそこでブルに出くわし、フレディはブルに喧嘩を売られる。イチローはやむなく二人の仲裁に入り、はじめてブルを殴りつける。それまでは退役軍人たちに対する負い目からであろうか、いかに罵倒され、侮辱されようとも反撃に出ることのなかったイチローだが、このときばかりはブルに向かって拳をふるったのである。その場を逃げ去ったフレディは、直後に事故で死んでしまう。その知らせを聞いたブルは、まるで赤ん坊のように泣き叫ぶ。ブルにとって、もはやフレディは憎しみの対象ではない。ブルは、退役



軍人もノー・ノー・ボーイも同じ喪失感を共有していたことに気づいたのである。ブルの涙はフレディのためであり、また自分自身のためのものであった。

合衆国に対する忠誠、愛国心の喪失という点において、ノー・ノー・ボーイと退役軍人の間に違いはない。ケンジがいち早く到達していたこうした認識は今やブルのものとなり、またイチローのものともなった。泣き叫ぶブルの肩に優しくかけられたイチローの手が、それを如実に表している。

Ichiro put a hand on Bull's shoulder, sharing the empty sorrow in the hulking body, feeling the terrible loneliness of the distressed wails, and saying nothing. He gave the shoulder a tender squeeze, patted the head once tenderly, and began to walk slowly down the alley away from the brightness of the club and the morbidity of the crowd. He wanted to think about Ken and Freddie and Mr. Carrick and the man who had bought the drinks for him and Emi, about the Negro who stood up for Gary, and about Bull, who was an infant crying in the darkness. A glimmer of hope --- was that it? It was there, someplace. He couldn't see it to put it into words, but the feeling was pretty strong. (250-51)

イチローにとって、もはや退役軍人たちに引け目や負い目を感じる必要はなくなった。今やイチローは忠誠登録によって日系二世がノー・ノー・ボーイと退役軍人とに分けられる以前の日系アメリカ人の立場に戻ったのである。後に残るのは、時間をかけてゆっくりと合衆国に対する愛国心を取り戻すことである。エミが語ったアメリカ合衆国を信じながら。

### おわりに

本稿執筆の直前、2001年9月11日、ニューヨークの貿易センタービルやワシントンのアメリカ国防総省、通称ペンタゴンを標的に同時多発テロが勃発した。実行犯は特定されたようだが、計画の首謀者は、イスラム原理主義の指導者のひとりであるオサマ・ビンラディン氏 (Osama Bin Laden) とされながらも、確たる証拠は提出されていない。こうした状況のなか、アメリカに住むアラブ系・イスラム系市民を迫害する行動が多数生じているという。戦時中の日本政府と何ら直接的な関わりをもたなかった日系アメリカ人の強制収容は、決して過去の出来事ではなく、まさに今のアメリカ合衆国の問題なのだということが、改めて認識されたこのたびの事件である。『ノー・ノー・ボーイ』は20世紀半ばに書かれた日系アメリカ文学だが、今始まったばかりの21世紀のアメリカ文学として読まれうるであろう。

注

- 1 ウィリアム・イエ (William Yeh) は小説『ノー・ノー・ボーイ』が読者に受容された軌跡と主人公イチローが小説のなかでたどる軌跡との間に相似的关系を見出している。William Yeh, 'To Belong or Not to Belong: John Okada's *No-No Boy*, 'Amerasia Journal, 19 (1993), 121-33 参照。
- 2 Gayle K. Fujita Sato 'Momotaro's Exile: John Okada's *No-No Boy*' in *Reading the Literatures of Asian America*, eds. Shirley Geok-lin Lim and Amy Ling (Philadelphia: Temple U P, 1992), p. 239.
- 3 『ノー・ノー・ボーイ』に関する近年の批評の動向については, Jinqi Ling, *Narrating Nationalisms: Ideology and Form in Asian American Literature* (New York: Oxford U P, 1998), p. 33 参照。
- 4 ノー・ノー・ボーイと退役軍人との相似については, スタン・ヨギ (Stan Yogi) も言及している。Stan Yogi, "You had to be one or the other": Oppositions and Reconciliation in John Okada's *No-No Boy*, 'MELUS, 21 (1996), 68 参照。
- 5 Michiko Nishiura Weglyn, *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps* (1976; Seattle: U of Washington P, 1996), p. 136.
- 6 John Okada, *No-No Boy* (1957; Seattle: U of Washington P, 1976). 作品の引用はすべてこのテキストによる。また, 引用末尾の数字はページを示す。
- 7 イチローと母親との関係は, これまでも重視されてきた。しかし, イチローに対する母親や日本文化の影響は必要以上に強調されすぎた嫌いがある。なお, イチローと母親との関係を論じたものとして Gayle K. Fujita Sato の前掲論文及び Masami Usui 'An Issei Woman's Suffering, Silence, and Suicide in John Okada's *No-No Boy*' in *Chu-Shikoku Studies in American Literature*, 33 (1997), 43-61 がある。
- 8 その最もナイーヴな批評として Dorothy Ritsuko McDonald, 'After Imprisonment: Ichiro's Search for Redemption in *No-No Boy*' MELUS, 6 (1979), 19-26 がある。
- 9 ケンジは足の治療のために車でイチローとともにポートランドの病院へ向かうとき, スピード違反で警察に捕まる。しかし彼は, 警察官から渡された違反カードを車の窓から捨ててしまう。この場面は, 国の法律に従う意思をつまらぬ国に対する忠誠をすっかり放棄してしまったケンジの姿を暗示しているように思われる。

## **Ichiro's Patriotism Recovered: An Essay on John Okada's *No-No Boy***

Kiyoto SATO

During World War II, over 120,000 Japanese Americans were unjustly incarcerated in relocation camps, where two questions were designed to test their loyalty and willingness to serve in the armed forces. Those who either refused to answer the questions or answered in the negative were called “no-no boy.” Ichiro Yamada, the protagonist of John Okada's *No-No Boy*, was one of them.

My first aim in this paper is to investigate and identify the real motivation that caused Ichiro to become “no-no boy.” Ichiro's mother, who is a chauvinist devoted to Japan, has been thought to be most influential in his decision. But Ichiro, who was born in America and loved America, did not share his mother's enthusiasm for Japan. Ichiro lost his faith and trust in America because the U. S. government violated the Constitution.

The second subject of mine is to trace Ichiro's struggling life into the novel. The loyalty questions divide Nisei into two groups: no-no boys and veterans who served in the armed to show their faith in the country. Ichiro, as one of no-no boys, feels inferiority to veterans. But veterans could not trust in post-war America because of its lasting racism. In the course of the novel, Ichiro comes to feel sympathy with veterans, for he becomes aware that they have lost their faith in America, too. The realization that there are no differences between no-no boys and veterans restores Ichiro to the status of Japanese American in the pre-war period.